

NPO法人「JAPI」 障害者の運転免許取得と 「仕事と収入」叶える

り入れていければと思います」と、新たな取り組みへの意気込みを語る。同団体に寄せられる相談には、「明日はわが身かも」と思うものが多いという。家族が障害のある人を隠そうとしていた約20年前に比べ、障害のある人をよく街中で見かけるようになった。同じ国の同じ地域に共に暮らす人として何が出来るか、その答えを見つけ出す手助けにも、JAPIは取り組む。

あえてアナログプロジェクト 障害のある人の収入をつくる点字プロジェクト

JAPIは、知的障害のある人や身体的な障害のある人、あるいは高齢者の介護予防等に、手作業で名刺や封筒に点字をプレスする機器を、授産施設に無償貸与し、そこで作業する人たちの収入とやりがいを作っていくという点字プロジェクトに取り組む。社会復帰を前提の授産施設だが、そこから一般企業に就労していく障害のある人はごくわずか。また授産施設に通うことが有償化されたことで、家族の負担が増え、自宅に引きこもりがちになる障害のある人も増えている。神川さんは、「ほんの少しでもいいから自分の手で収入を」と願う障害のある人本人と家族のために、約11年前からあえてアナログの点字プレスの普及に努め、授産施設への導入実績は約250箇所を超える。JAPIでは、点字プレス機の導入を呼びかけると共に、名刺の発注や点字プレス機の導入支援をする企業・団体を募集する。

運転免許取得、点字プロジェクトに関する問い合わせは、
特定非営利活動法人運転免許取得支援センター

TEL 03-322211705
FAX 03-6203-8515
ホームページは <http://www.for-dab.jp>
E-mail kamikawa@for-dab.jp



JAPI代表・神川麻紀

特定非営利活動法人運転免許取得支援センター（JAPI）は、障害のある人の運転免許取得支援と、主に授産施設に通う障害のある人自身に仕事と収入をもたらす点字プロジェクトを行う。昨年7月に内閣府を所轄官庁に設立され、代表を務める神川麻紀さんは今後の活動への思いを次のように語る。

「障害のある人は家族が面倒みるから大丈夫、それより命を助ける難民救済の方が必要では」と言われる人がいます。助けを必要とする人へ手を差し伸べる活動は、すべて大切です。その中で、例えば『いのちの電話』の相談件数が増えているように、生きていくための心の支えが、いま重要な課題になっています。障害のある人の中には何ヶ月も何年もほとんど他の人と話もせず、家の一室で過ごさなくてはならない人もいます。引きこもりが「障害のある人だから仕方ない」ということ自体が違います。引きこもり状態が続いたら、身体的な障害がない人でも精神的にまいってしまいます。障害のある人が就労する、勉強する、友人と触れ合う、旅行に行くなど、何をするためにもまず外に出るために必要なこと（免許とクルマ）を、私たちの活動を通じて支援して行きたいと考えています」

障害のある人の外出支援策では、例えば駅のバリアフリー化が主要駅で進むものの、改札からホーム



JAPIのホームページ

への昇り降りが階段のみという駅が、まだ沢山ある。駅舎にとどまらず、街のバリアフリー化は障害のある人だけでなく、中高年者にも必要な整備。しかし、駅舎に限っても、完全バリアフリー化の実現は目途さえ見えない遠い先の話で、現況を見ると、「クルマ」は障害のある人が自由に、安全に外出できる手段の一つ、免許を取得できる人には欠かせない外出支援策と言える。当然、神川さんが「高齢者も加齢によるハンディキャップ者であるように、障害のない人は常に障害のある人の予備軍です。車いす使用者は特別な人ではなく、同じ時と場所を生きる、障害のない人と紙一重の人だということを忘れてほしくありません」と話すように、誰でも病気や事故で車いす生活が「明日はわが身」の可能性があるだけに、JAPIの取り組みは障害のある人に限った活動ではない。

神川さんは、「子供の教育の中で、信義則や道徳観というものを自然と教えられていた自分の子供時代と比べて、個人主義が強まった分、他者への関心や関わり方が変わってきたと思います。障害があるから庇護してもらって当たり前という考えや、車いす使用者のことなんて、知ったことじゃないという考えを改めてもらえるよう、障害のある人と障害のない特にお子さんが触れ合う機会を、活動の中に取

「障害のある人の運転免許」で免許をとった



「免許をとろう!」
そう思った時に、
心の氷が溶けた
気がしました

佐々木栄一さん 茨城県在住（51歳）

「やっと念願の運転免許証がとれました」。笑顔で話す佐々木さんは、高齢の母親と暮らしている。33歳の時に転落事故で腰椎を損傷した。足の裏に少し感覚があり、今現在つかまり立ちができる。今でもリハビリテーションを続けている。「約18年前、転落後の治療を終え、転倒した病院ではずっと行ったり来たり、十字架のような起立台に身体を固定して行ったり来たり、そういう大変な中で今でもよく覚えていました。当時デザイナーの仕事をしていましたから、何とか社会復帰をしようと思ったんです」

自動車の運転免許をその時ではなく、今取得しようと思った理由について、佐々木さんは「元々変形性股関節症であった母が、自分を産む時にさらに症状が悪化し、人工股関節になっていました。2年前に大病をして、今は家の中では2点歩行器を使ったり、つかまり立ちをしてはいますが、外では車いすです。自分の身体を支えるのが精一杯なので、もちろん重たいものは持てません。母が通院したり、買物をしたりするのに、自分がかんたかつかり立ちができるのを利用して、母の車いすを押しました。その時に「障害があっても、車いすが押せる。だったら、僕が運転して母を連れて来れるじゃないか」と、自動車の運転免許をとろうと思ったんです」

それまで周りから「普通の人のように動けないんだから、免許があった方がいいよ」「仕事するんだって免許がなければ」「言われていたが、なんとなくそんな気にはなれなかった

「免許をとろう」と思ってから、いくつかの教習所に問い合わせもしましたが、親身になってくれるところはありませんでした。持ち込み車庫なら入校させてやる、という教習所もありましたが、免許がとれるかたれないかわからないのに、経済的にも厳しかったし、お金をかけたくなかった。たまたま知った「障害のある人の運転免許」の専任スタッフからアドバイスを受けて、何もわからなかったので安心して教習所に入校できました」

佐々木さんが入校したのは、JAPIの提携校の湘南鴨宮自動車学校。JAPIでは、医療関係者も含んだ専任スタッフがコーデイネイトをする仕組みをとり、運転免許に関する相談を受けると、書面や電話で専任スタッフがヒアリングを行い、一人ひとり違う身体状況、教習所の設備、福祉車輛、教習所の空枠状況、同じような障害を指導した指導員がいるかどうかなどを総合的に判断し、教習所と相談した上で入校する仕組みをとっています。ここが単に紹介を行う通常の斡旋事業者と大きく異なる点だ。

佐々木さんは短期で教習を終わらせたかったため、通学学校である湘南鴨宮の近くのホテルに宿泊しながら車いすで教習所に通った。「初めはバスが来ていたんですけど、なんだか面倒くさくなつてしまつて、運動にもなるし、電車で駅くらいの距離だから車いすでもつてみようかと思いました。入ってからはずいぶんアクセルもブレーキもわからないけど、ゼロどころかマイナースからの出発。縦列駐車も苦労しましたが、何より「黙視」が苦手でした。左右や後方の安全確認をするのですが、教習所の中であったり、指導員の方がいらつしやるのでつい安心して忘れてしまつてしまうんですね。仮免前学科効果測定も最初は60点という成績だったが、最終的には92点で合格した。高速教習では箱根山に行き、「芦ノ湖を見て、寒かったけど、とても楽しかった。これからは3年たつたら、二種免許にも挑戦したいし、国際ドライビングも取りたい。今まで全く車の楽しさを知らなかった。運転が気分転換や趣味になつて、やみつきになつて。もちろん、安全運転だね。注文した新車もついでに来ます。車がくれば、苦労させた分、母に少しでも恩返しができますわ」